“Once a bitch” あるいは傾城と悲史

The Sound and the Fury と『或る女』より

後藤　和彦

男性小説家がことさら女性を主人公としてその生涯を小説に書くのは、女の一生になにがしか仮託したいという意図があるのだろう。古今東西、女の一生を描いた小説は多い。『女の一生』と訳されるのが常の小説もある。『ボヴァリー夫人』、『チャタレイ夫人の恋人』、『アンナ・カレーニナ』、『緋文字』と誰でも知っているその種の作品をあげると、ある女が自分の生活に慊らず、道ならぬ恋に落ち、許されない性交渉に及び、社会から放擲され元に戻れなくなるというパターンを等しく有している。この発表は、許されない性の自由を謳歌した女性の不可逆の転落の悲劇に、小説家の歴史認識が現れるという仮説に立ち、これら「傾城」たちの「悲史」のうち、小説家の歴史認識の側に特別痛切なものがある場合、つまり歴史の推移に不可逆の断絶を認識せざるを得ない小説家のその種の小説を引き合いに出して感触の違いを確かめようと思い立たれた。

女の一生ではなく、歴史そのものが不可逆に屈曲してしまう場合とは、ドイツの文化史家ウォルフガング・シヴェルブッシュが『敗北と文化』（2001 年）で紹介した「国」の場合を想定することができるが、今回は彼が分析対象としたアメリカ南部と、加えて我が国の事例を取り上げることにした。第二次大戦後の日本が、同じくドイツと並び考察対象とされなかったのは、シヴェルブッシュによれば、敗北があまりにも壊滅的であったので、勝者に対し直ちにルサンチマンを形成し「敗北の文化」を戦後に醸成するのに必要な民族の「背骨」がへし折られてしまったからだ。が、日本の「敗北の文化」が特殊なのは、私の見方では、その近代において「世界公法」を盾に西欧列強から外圧に屈して国を開いた「明治維新」と、それから先の戦争における「無条件降伏」と二度にわたる民族的「敗北」を喫したことによるのであり、この近代史における独自の二重屈曲を経た「敗北の文化」日本から有島武郎の『或る女』を取り上げ、シヴェルブッシュも分析対象としている、いわば穏当な敗北経験を経たアメリカ南部からウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』を取り上げて、両者の感触の違いもさらに探ってみたいと考えたのである。

上にあげたような小説中の「傾城」たちと比して、キャディ・コンプソンも早月葉子も、無論、ある情愛をもって描き出された女性たちだとはいえ、端的に扱われ方が無残だ。一般に傾城たちは謳歌してしまった近代的自由に眉をひそめる保守的社会の保守的美学によって手ひどい目にあうのだが、より執念深くひどい目に遭わせられる、さらにいえば、南部より日本の事例のほうが執拗にあられもなくひどい目に……といった全体的印象を私はもっていて、発表ではキャディと葉子、それぞれの運命の性体験、その一線を超えるともうこちらへの戻ってこれなくなる経験が物語られる部分をより出し、その体験が自分にもたらした情動が理知を超え、言語を絶するものであったことをいずれも「死ぬ死ぬ」「何度でも死ぬ」といった、ポルノ映画や小説などにも頻繁に用いられる表現以下の表現、あるいは表現を超脱した表現を等しく与えられているのを確認した。

なぜそうなのか？なぜアメリカ南部と日本とは時代を先取りして自由を謳歌した女たちに厳しいのか？葉子には国木田独歩夫人であった佐々城信子というモデルがあり、確かに小説通り太平洋をまたにかけた大スキャンダルを引き起こした美人だったのだが、倉地三吉のモデルとなった男とのあいだも睦まじく、やがて一娘をもうけ、男の病没後は田舎にこもり、古稀を超える生涯を終えたという事実が残っており、スキャンダル以降の世間に背を向けた逃避行と燃えるような嫉妬と愛欲の日々、それに倦み疲れた倉地の疾走、葉子本人の不治の病の罹患、これでもかこれでもかと痛め続けられる葉子の姿は完全に有島の創作であったともいう。

それが「敗北の文化」のなせるところだ、というのが発表の結論だった。他の傾城たちを取り囲む社会がそれぞれ軋み立てながら近代へと自然推移してゆくのに対して（傾城たちはいつも時代を先取りしすぎるのである）、つまりそれぞれの社会の内部に解放的近代の萌芽を胚胎しているのに対して、「敗北の文化」の特徴は、内在する歴史的脈略を外力によって断ち切られ、馴染みのない「近代」を外部から首をすげかえるように移植された点にあり、したがって「敗北の文化」下の傾城たちを規約違反といって咎めるのは、無理やり断ち切られ切り口も無残な「首」だったからだ。時代の推移にしたがって用無しになって、古い臭いと誰もが思う保守的美学からではなく、この民族的敗北という事態を招来する程度に（戦後的観点から見れば）誤ったものであったとしても、しかし、それは昨日まで生々しく血の通っていた美学あるいは倫理だったのであって、そこからの報復は、知的に見て理不尽であるのは致し方ない、もはやそれは知的であることを歴史的に許されず情の産物へと姿を変えてしまったのだから。「情」は「知」より恐ろしい、どこまでも陰湿に報復し続ける――このあたりまでが当日行き着いたところだった。